

感染症発生動向調査委員会報告 5月

《今月のトピックス》

- 東京都、埼玉県、千葉県に続き、横浜市でも麻しんが流行中
- インフルエンザは、全国でもほぼ終息に向かう
- 2006年の全国のHIV/AIDS報告数は過去最高で、3年連続で1000件を超えた

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年4月23日から平成19年5月27日まで(平成19年第17週から第21週まで。ただし、性感染症については平成19年4月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

＜インフルエンザ＞

定点あたり患者報告数は、第18週に0.61と流行期の目安である1.0を下回り、第21週は0.05と、横浜市における流行は終息しました。全国でも、第20週で1.20と、ほぼ終息に向かっています。

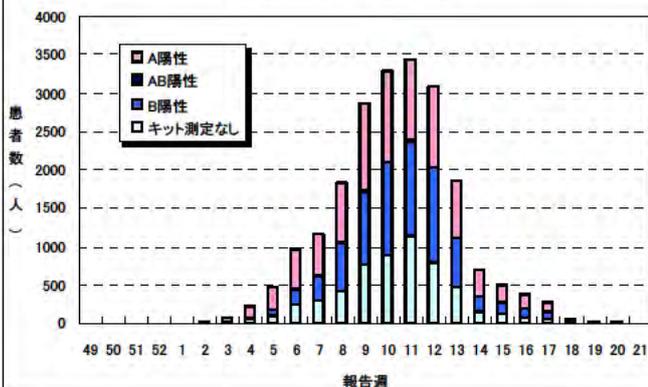
横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第21週までのウイルス分離・検出数は、Aソ連型 13、A香港型 61、B型 58となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、5月29日現在、Aソ連型367、A香港型2079、B型1742です。

今シーズンは、過去5シーズンと比べて一番遅い第4週から流行期に入り、規模としてはさほど大きくありませんでしたが、ピークが第11週と3月中旬で、定点あたり1.0を下回ったのも第18週と5月に入っており、過去20年と比較しても、一番遅い時期の流行となりました。大きな流行のあった2004-2005シーズンも、流行開始は第3週と遅かったのですが、ピークは第7週でした。また、終息前に、例年に比べて少し高めの状態がしばらく続いたのも、今シーズンの特徴だったようです。全国では、5月中旬でも学級閉鎖等の報告があがっています。こうしたことから、インフルエンザについては、1年を通して発生の状況を見守る必要があると思われます。

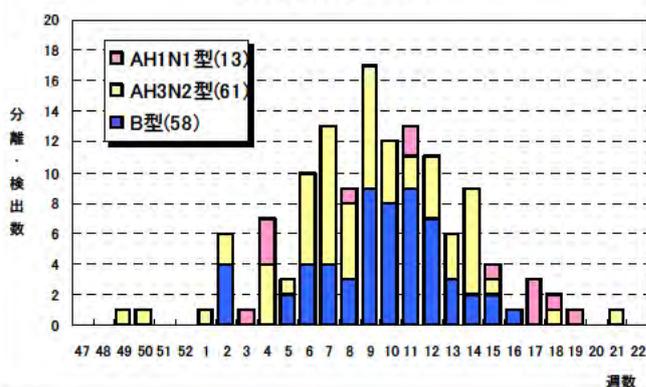
平成19年 週一月日対照表

第17週	4月23～29日
第18週	4月30～5月6日
第19週	5月 7～13日
第20週	5月14～20日
第21週	5月21～27日

横浜市内定点医療機関のインフルエンザ報告患者における迅速診断用検査キットによるA型・B型の判定



定点ウイルス調査分離・検出状況(2006/2007シーズン)



インフルエンザ迅速診断キットの結果をご報告いただいた集計と、横浜市衛生研究所での検査結果を示しました。

< 咽頭結膜熱 >

第17週には定点あたり0.44と昨年同様に高めの値でしたが、その後例年とほぼ同じレベルに低下し、第21週は0.32でした。しかし区別では、定点あたり2.5と相変わらず磯子区での発生が目立ち、港北区でも1.1と先月同様高い値です。2003年と2004年は、5月末頃から増加し大きく流行しているため、今後の動向が注目されます。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

第3週に急に増加し、その後、高いレベルで増減を繰り返しています。第21週は定点あたり2.50でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は2.38、川崎市は3.39でした。区別では、都筑区での発生が目立ち、第17～21週で全て警報レベルの4をこえており、特に第17週は18.3とかなり高い値でした。また、第21週は、瀬谷7.0、都筑6.3、栄5.0、青葉4.7と、4区で4以上でした。全国でも、過去5年間の同時期と比較してやや多い状態が続いていて、第20週は定点あたり2.55です。引き続き注意が必要と思われます。

< 伝染性紅斑 >

例年に比べて高めの値が続いていましたが、第16週頃より例年並みの値となり、第21週は定点あたり0.59でした。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.73、川崎市は0.88と、どちらも横浜市より高めです。

全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第20週は定点あたり0.78でした。例年、6月頃が一番高いようなので、引き続き動向には注意が必要です。

< ヘルパンギーナ >

昨年は、この頃に立ち上がりが見られました。今年は第21週は定点あたり0.07と、まださほどではありませんが、全国では第20週で0.20と少し増加し始めています。例年、6月に入り急に増加してくるため、これから注意が必要です。

< 麻しん >

現行の感染症生動向調査では、2001年をピークに減少、2004年に激減、2006年は、全国で520人、横浜市では16人という年間患者報告数でした。しかし、2006年の4～6月には、関東を中心とした麻しんの流行が報告されました。2007年に入って、全国的には過去2年と同様に低い状態が続いていますが、関東での発生は継続していました。

4月に入り、埼玉県や東京都を中心として、麻しんが流行してきました。ゴールデンウィーク後は、さらに流行が拡大し、東京都では、高校や大学での集団発生や、休講等が続きました。横浜市でも、第14週以後報告が続いており、2007年第21週までの累計報告数は、38となり、大学の休講や、中学校の臨時休業等が行われています。成人麻しんも、昨年は報告がありませんでしたが、今年は累計報告数が18となっています。未罹患患者、未接種者への予防接種を呼びかけていますが、流行はまだしばらく続くと思われるので、拡大防止へ向けて、引き続き注意が必要です。最新の情報については、横浜市感染症臨時情報(麻しん)をご覧ください。
(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html)

感染症発生動向調査においては、麻しんは小児科定点から報告され、届出基準では、15歳以上は除くとなっており、一方、成人麻しん(15歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻しんの患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきますので、その分も計上しています。

< マイコプラズマ肺炎 >

3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。今年に入ってからは、今までに26人の報告がありました。第17～19週に各2人ずつ、第20週には6人と、このところ、報告が目立っています。全国での報告は、過去5年間と比較すると多い状態が続いており、引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

< 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。4月は、特に大きな変化は見られていません。

さて、5月22日に厚生労働省エイズ発生動向委員会から、2006年エイズ発生動向の概要について発表がありました(速報値については2月の本報告でお知らせしています)。2006年に新たに報告されたHIV感染者は952で前年の832より増加し過去最高となり、AIDS患者も406と前年の367より増加し過去最高となりました。

なお、6月1日～7日は、HIV検査普及週間で、これを機会に国や都道府県等は取組を強化しています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

< ウイルス検査 >

2007年5月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点から38件(咽頭ぬぐい液)、眼科定点から3件(結膜ぬぐい液)、基幹定点2件(髄液、便各1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎28人、胃腸炎3人、リンパ節腫脹・筋肉痛1人、発疹1人、結膜炎1人、眼科定点は角結膜炎3人、基幹定点は髄膜炎1人、胃腸炎1人でした。

5月10日現在、小児科定点の気道炎患者それぞれ1人の検体からインフルエンザウイルスAH3型、インフルエンザウイルスAH1型、アデノウイルス2型が分離されています。また、リンパ節腫脹・筋肉痛の患者検体からはインフルエンザウイルスAH3型が分離され、さらに、PCR検査でRSウイルスとインフルエンザウイルスAH1型が検出されました。PCR検査ではこのほかに小児科定点の気道炎患者4人の検体からヒトメタニューモウイルス、1人の検体からRSウイルス、基幹定点の胃腸炎患者検体からノロウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

< 細菌検査 >

5月の感染性胃腸炎関係の受付は5菌株で毒素原性大腸菌が1件検出されました。呼吸器系検体の受付は1件でマイコプラズマおよびオウム病クラミジアは検出されませんでした。